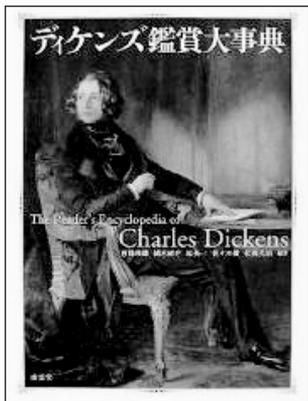


西條隆雄・植木研介・原英一・佐々木徹・松岡光治（編）

『ディケンズ鑑賞大事典』

東京：南雲堂、2007、20,000 円、836 頁（CD-ROM 付き）。

木村晶子



「これ一冊を読めば、そこいらの大学教授よりもディケンズにくわしくなれる」という毎日新聞の書評（2007年9月16日）も誇張とは言えないほど、行き届いた本である。本書は、ディケンズ・フェロウシップ日本支部が、上記5名の編集委員に加えて30名以上の執筆者・CD-ROM作成者によって、数年がかりで完成した大著で（執筆要綱作成は2002年にまで遡るという）、60頁を超える索引だけからも、綿密な編集作業の労苦がうかがえる。編者の西條隆雄氏が語る、「専門家も一般

読者もこれを読めばディケンズのすばらしさを理解することができるような書物」という目的は十二分に果たされており、各章に付された数々の図版も楽しみを添えている。全体の構成は、I. 「ディケンズの生涯」、II. 年代順に配列された各作品の解説、III. 「想像力の源泉」としてディケンズの文学の土壌や、当時のロンドンや大衆娯楽の解説、IV. ジャーナリズム、公開朗読、素人演劇などの「多岐にわたる活動」、V. 「ディケンズ文学の広がり」として、挿絵、映画、日本の作家たち、シェイクスピア、ドストエフスキーなどとの関わり、VI. 「批評の歴史」、VII. 書誌の七部になっている。

第一部の小池滋氏による伝記的解説は、「ねえ、パパ、ディケンズおじさん死んじゃったの？じゃ今年からはサンタクロースは来ないんだねえ？」というディケンズの訃報に際する一人の子供のことばの引用から始まり、ディケンズの生い立ちから死までをたどりながらこの偉大な作家の光と影の部分のみごとを描き出しており、読者は一気にヴィクトリア朝に誘われる。

第二部の18名の執筆者による作品解説はすべて、出版情報、時代背景、執

筆・出版にいたる経緯、批評史、作品へのアプローチまたは作品のテーマや留意点の解説という形式をとっている。一般読者も読みやすいようにという配慮から、あえて学術論文としての深みを犠牲にしている面も感じられるものの、限られた紙幅でありながら十分な情報と執筆者の問題意識が示されていて、いずれも優れたものとなっている。残念ながらギヤスケルに関する言及は少なく、列挙しても、ディケンズの雑誌にクリスマス・ストーリーを執筆した作家であること（篠田昭夫氏『クリスマス・ストーリーズ』）、『メアリ・バートン』に注目したディケンズから、『ハウスホールド・ワーズ』発刊の際に執筆依頼を受けたこと（松村豊子氏『ドンビー父子』）、『北と南』を執筆中のギヤスケルに、ストライキの題材を横取りするつもりではないと納得させるのにディケンズが苦心したこと（廣野由美子氏『ハード・タイムズ』）、ディケンズが彼女宛にクリミア戦争の悲惨さを述べる手紙を書いたこと（要田圭治氏『リトル・ドリット』）などの情報がある程度である。ジョージ・エリオットやギヤスケルに対する対抗意識が、『リトル・ドリット』執筆時にディケンズの芸術性への意識を高めた気配があると要田氏が述べている点は、ギヤスケルに対する賛辞と解釈できるかもしれない。

だが、直接の言及はなくてもギヤスケルとの関連性を意識して第二部を読むとすれば、甲斐清高氏の『ニコラス・ニクルビー』におけるメロドラマに関する箇所と、原英一氏の『骨董屋』のおとぎ話的要素・グロテスクなものに関する興味深い解説が、ディケンズと同じくヴィクトリア朝的メロドラマ性をもちながらも、グロテスクなものには至らなかった（排除したと言ふべきかもしれないが）ギヤスケルの作品の特性を考える上で貴重な視座を提供してくれる。また、松村豊子氏の『ドンビー父子』におけるヒロイン像や、新野緑氏の『デイヴィッド・コパフィールド』の女性と家庭に関する議論、中村隆氏の『荒涼館』の特異なヒロイン像や病のテーマに関する議論は、ギヤスケルの女性像を考察する際にも大いに参考になると思われる。

ディケンズの文学に描かれた情景こそ、まさにヴィクトリア朝のロンドンのイメージそのものとなっているほどだが、第三部の久田晴則氏の「都市ロンドン」は、改めてこの作家とロンドンの「不可分の関係」を丹念にたどることで、作者の描く空間と文学とのダイナミズムを考えさせてくれる。同じく第三部のピカレスク小説や児童文学、大衆文学を解説した青木健氏の「文学の土壌」とポール・シュ

リック氏の「19世紀の大衆娯楽」は、ギヤスケルの物語の才能を考える上でも示唆に富んでいる。

ジャーナリズム、朗読活動、演劇活動、社会活動を視点としたディケンズ像が描かれる第四部においては、ディケンズ編集の週刊誌『ハウスホールド・ワーズ』に『クランフォード』『北と南』の他いくつもの短編を発表した作家としてギヤスケルの名前が出ているだけだが、ディケンズの幅広い活躍の全貌を知ることによって、彼女が人気作家となる上でディケンズが果たした役割の大きさと同時に、両者の確執の意味をも問うことができるだろう。また、まさに数人分の人生を送ったディケンズとは別の形で、牧師の妻・良き母・作家という異なる顔をもって数人分の人生を生きざるを得なかったギヤスケルが、やはりディケンズと同じく五十代で亡くなったことにも改めて感慨をもった。

第五部の「ディケンズ文学の広がり」は、本書でも特に発見に満ちた章だった。玉井史絵氏の「小説出版と挿絵」では、クルークシャンクやブラウンらの著名な挿絵画家とディケンズとの関係が誠に興味深く描かれており、ディケンズ作品の人気に果たした挿絵画家の役割の大きさと共にそれぞれの人間ドラマが印象的である。ペーパーバック収録の挿絵にしか馴染みがなかった者としては、当時の読者にとってのディケンズの書物の意味を再認識することができた。佐々木徹氏の「ディケンズと映画」では、エイゼンシュテインのディケンズとグリフィスに関する論考から、ディケンズ作品の映画化、テレビ映画に関する解説までが簡潔ながら要を得た形でまとめられており、文化論・映像論などの視点からの研究の一層の広がりや深まりが予感できる。松村昌家氏の「日本の作家たち」では、坪内逍遙や夏目漱石、徳富蘆花などから辻邦夫、大江健三郎に至る作家たちとディケンズとの接点が魅力的に描かれると共に、明治時代の新聞に連載された細香生の『オリヴァー・トゥイスト』の翻訳『小桜新八』までもが挿絵入りで取り上げられている。日本近代文学におけるディケンズの多大な影響力を知り、目を開かれる思いである。ポール・シュリック氏の「ディケンズとシェイクスピア」では、ディケンズの生涯にわたるシェイクスピアへの傾倒が、演劇人・劇評家としての姿から描かれると共に、その作品の演劇性、娯楽性、言葉の獨創性が両者の共通点だと論じられる。両者とも「大衆性と芸術的精練とは互いに少しも矛盾しない^{エンタテイナー}と考える娯楽作家であった」ことは、ディケンズのみならずヴィクトリア朝小説

の演劇性と娯楽性について考える糸口を与えてくれる。

続く「ディケンズとドストエフスキー」は、かのアンガス・ウィルソンによる1970年の講演の翻訳である。講演であるため話し言葉でわかりやすく、影響関係や具体的な作品の引用をまじえた指摘がなされ、暗い世界像における共通点が丁寧に述べられている。「非常に複雑で多義的な人生像を描いた一方で、ヴィクトリア朝的美徳の最良の意味において『まじめ』なままであったということ」がディケンズに関して最も注目すべき点だという結びの部分は、まさにポリフォニックなディケンズ文学の魅力を端的に示しているだろう。ただ、今日の新訳によるドストエフスキー人気の再来を思えばこの章は時宜に適っているのかもしれないが、現在活躍中の研究者による書き下ろしからなる本書にあえて収録されていることには違和感も覚えてしまう。

第六部では、「揺れ動く評価」(1870-1940)、「本格的研究のはじまり」(1940-1960)、「評価の確立」(1960-1980)、「新しい展開」(1980-2006)の四期に分けてディケンズ研究の歴史がたどられている。ディケンズ研究を志す人々にとっては、まさに格好の手引きであろう。(それにしても、「新しい展開」を担当した村山敏勝氏の急逝が改めて惜しまれてならない)

そして、付録と呼ぶのは申し訳ない思いがするのがCD-ROMである。実際に使ってみると、〈固有名詞ど忘れ症候群〉に悩む筆者には何ともありがたく、*OED*のCD-ROM以来の感動だった。西垣佐理氏担当の「地名」と西條隆雄氏担当の「ロンドン地図」があれば、ディケンズ・ワールドで好きなだけ遊べる気分になる。〈ディケンズ検定〉も可能に思える、あの膨大な数の登場人物も、宮丸裕二氏担当の「人物」の検索で、作品名だけでなく登場する章もわかり、野々村咲子氏の「あらすじ」も丁寧にまとめられている。行き届いた武井暁子氏の「分冊出版表」「年譜」、ディケンズの祖先のみならず現在に至る子孫までも含む矢次綾氏の「系図」には見入ってしまう。また何といても圧倒されるのが、松岡光治氏の「文献」である。伝記・生涯、社会・ロンドンなどのテーマ別や作品別で網羅された日本における研究書誌、1870年以來の海外の研究書、作品の邦訳のリスト(1888年の『影法師』以来、『クリスマス・キャロル』の邦訳版が70冊近くある!)など、まさに本書を21世紀の大事典にふさわしいものになっている。

ディケンズについて学ぶためだけでなく、ヴィクトリア朝とヴィクトリア朝の

文学を学ぶために、いやむしろその喜びを知るために、本書はギャスケル研究者・愛好家にとっても非常に貴重な一冊となるだろう。

(早稲田大学教授)

